

# 1996年における果樹カメムシ類多発生の現状

静岡県病害虫防除所 **増 井 伸 一**

## はじめに

1996年はチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ等の果樹を加害するカメムシ類の越冬量が全国的に多く、農林水産省の新・発生予察ネットワーク(JPP-NET)によれば、4月から6月末までに関東以西の29都府県で注意報が出されている。さらに7月以降は福岡県をはじめいくつかの府県で警報に切り換えられ、カメムシによる被害防止に細心の注意が払われている。

静岡県においても3種のカメムシ類の発生が県内全域で多く、中でもチャバネアオカメムシの発生が特に目立っている。ここでは予察灯データ、巡回調査結果および防除員からの報告をもとに、チャバネアオカメムシを中心にカメムシ類多発の現状について述べてみたい。

## I 発生経過と多発原因

チャバネアオカメムシは年2世代、ツヤアオカメムシは年1~2世代と推定され、両種とも成虫で越冬する。越冬個体は8月上旬まで活動を続けるが、主な産卵場所はスギやヒノキであり、幼虫はこれらの毬果を吸汁して成長する。スギやヒノキでは6月下旬から9月まで幼虫の発生が見られ、幼虫期間を考慮すると7月下旬から第一世代成虫が発生すると考えられている(池田ら, 1976)。カメムシによる果樹の被害は、越冬成虫により春から8月上旬までに発生する場合と、新成虫により8月以降に発生する場合の二つのパターンがあり、成虫の発生時期により被害を受ける果樹が異なる。

1995年と96年の予察灯によるチャバネアオカメムシおよびツヤアオカメムシの誘殺消長を、図-1, 2に示した。チャバネアオカメムシが多発する傾向は1995年8月下旬から見られており、9月の誘殺数は1981年からの最大値を大幅に上回り、平年の54倍の値となった。1996年になっても誘殺数は多く、5~6月の誘殺数は平年の24倍であった。なお、同時期のツヤアオカメムシの誘殺数は平年の8倍であり、両種の誘殺数は7月に入っても依然として多く推移している。

カメムシの発生密度に関与する要因として、①餌植物

の種類と量、②越冬量、③気象要因、④天敵、などが挙げられている(井上, 1986)。1995年春はカメムシの越冬量は少なかったが、エサとなるスギやヒノキの毬果が例年のない豊作となるとともに、7月下旬の梅雨明け以降は高温少雨で推移したため、幼虫の成育に好適な条件となった。加えて、大きな台風の襲来はなかったため、幼虫の死亡率が低かったことが推察される。このために

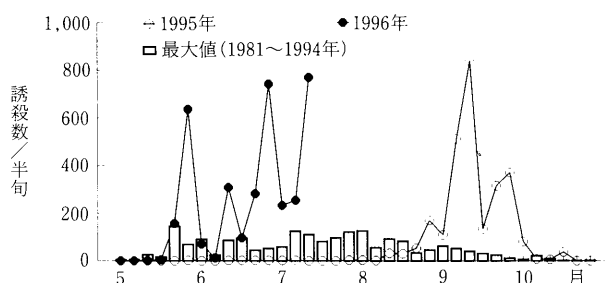


図-1 予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺消長 (静岡農試内)

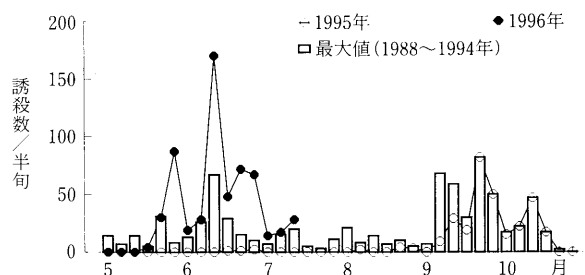


図-2 予察灯によるツヤアオカメムシの誘殺消長 (静岡農試内)

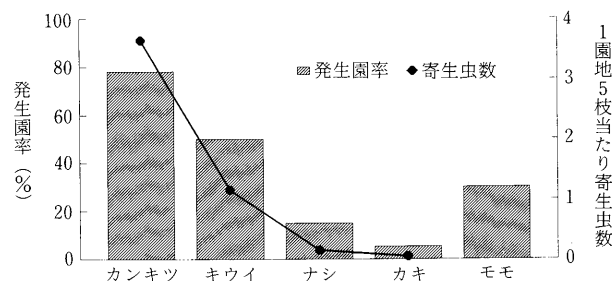


図-3 5月中旬の静岡県内の果樹園におけるカメムシ類の発生状況 (1996年)

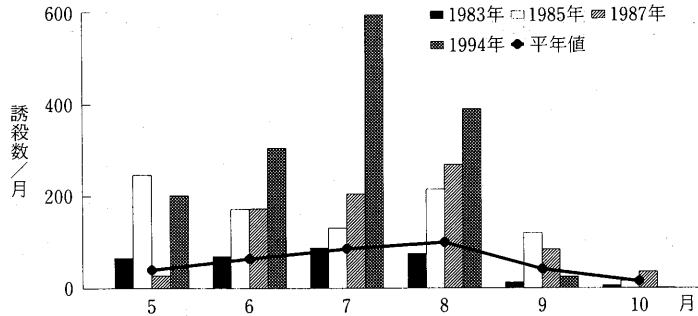


図-4 越冬量が多い年の予察灯によるチャバネアオカメムシ誘殺消長 (静岡農試内)

1995年秋の大発生につながったと考えられる。また、これらの個体の多くは越冬に入ったと推定され、チャバネアオカメムシの越冬期間の死亡率は低い(守屋ら, 1986)ことから、1996年春から今日における多発は、前年の1995年秋には既に予想されていた。

## II 果樹における発生状況

チャバネアオカメムシは、春に越冬場所からエサを求めて分散し、サクラ、クワ、ウメ、モモ、カンキツ等に移動する(小田, 1980)。1996年5月14~23日に行った静岡県内の果樹園におけるカメムシ類の発生調査結果を図-3に示したが、1園地5結果枝の叩き落とし法による調査では、この時期に開花期に当たるカンキツに寄生が多く見られ、モモやキウイにも寄生が見られたが、ナシとカキでは少なかった。静岡県ではカンキツが広く栽培されており、この時期に一時的に寄生する種々の植物のなかで、サクラやクワとともに重要と考えられる。また、カンキツの開花が終了した時期にあたる5月第6半旬に予察灯への誘殺数が増加したことから(図-1, 2)、この時期にカメムシの移動が起こり、ナシ、モモ、ウメ、ビワ等に多数飛来したものと考えられる。その後も予察灯への誘殺数は多く推移していることから、果樹園にはカメムシが繰り返し飛来しているものと推察される。これらの果樹では幼果期から収穫期までに継続して加害され、一部園地では7月中旬までにナシでは奇形果、モモやウメでは果実に吸汁痕が見られている。

このほかには、チャ園で5月の摘採時にチャバネアオカメムシが多く見られるという報告も多く寄せられ、7月に入ってからも成虫が多数見られているが、被害は見られない。

## III 今後の発生

7月中旬の段階ではスギやヒノキに寄生している幼虫

は少なく、本年はエサとなるスギやヒノキの毬果の着果量が少ないために、新成虫の発生量はそれほど多くならないと予想される。したがって、今後は越冬成虫の動向に注意する必要がある。

予察灯の調査で、5~6月にチャバネアオカメムシの発生が多い年の月別誘殺数推移を図-4に示したが、このような年は8月まで誘殺数が多く推移する傾向が見られる。静岡県においてチャバネアオカメムシの越冬世代によりカキ「前川次郎」が被害を受ける時期は7月下旬~8月上旬であり(池田ら, 1976)、ナシやモモ等についてもこの時期まで防除が必要と考えられる。また、カンキツについては7月から早生品種が被害を受ける時期となる。本年におけるカメムシは過去にない大発生であり、7月中旬時点で一部の圃場であるが、既にカキにカメムシによる被害が見られている。さらにスギ、ヒノキの着果量が少ない年はこれらの林に移動せず果樹園にとどまる個体が多いとの指摘もあることから、今後の推移を注意深く見守る必要がある。

## おわりに

果樹を加害するカメムシ類については、長年の研究により発生生態が解明され、精度の高い発生予察が可能となっている。しかし、成虫の移動等については未解明の部分も残されている。山林に接した果樹産地では、カメムシによる被害が大きいため独自に予察灯を設置し、防除実施の判断を行っているが、本年のような多発年は果樹園への飛来が長期にわたり、防除は栽培者の労力的、精神的負担が極めて大きい。より精度の高い予察法の開発とともに防除効果の高い薬剤の開発が望まれる。

## 引用文献

- 1) 池田二三高ら (1976): 関西病虫研報 19: 39~46.
- 2) 井上晃一 (1986): 植物防疫 40(6): 289~292.
- 3) 守屋成一ら (1986): 応動昆 30: 106~110.
- 4) 小田道宏 (1980): 植物防疫 34(7): 309~314.